

✿ 受け継ぐということ

甲州印伝の知名度が向上していったのと同時に、株式会社印傳屋上原勇七では、十三代上原勇七により、一子相伝だった製作技術がすべて公開され、職人による分業制となった。新しい時代における商品の普及と技術者の育成を見据えての決断であった。

技術はつながれ、新たな歴史を刻みはじめた。近年の甲州印伝では、オリジナルブランドや印伝の源流のひとつでもある天平文化へのオマージュとなる協賛商品、モダンで鮮やかな色を用いた製品といった、伝統と現代的な感性、そして実用性が共存する商品展開が行われている(写真14)。さらに、キャラクターやイベントとのコラボレーションのほか、山梨で捕獲された鹿の皮を素材としたプロジェクトも行われている(写真15・16)。多くの人の手に届くように、手に取りたくなるように工夫し、時代に合わせた製品を生み出す努力と販売に対する情熱を燃やし続けたからこそ、甲州印伝は生き残ってきた。山梨の社会とつながるとともに、再び土地と素材が結びつくための活動も始まった。

文化財のように形を変えずに守り残すことが大切な文化もある。一方で、生活のなかで多くの人に使われることによって生き続け、守られていく技術もある。遠い異国の美しい革に焦がれた記憶と、山梨を代表する産物になろうと全国や世界に踏み出した気概、この土地とともに技術をつないでいく確固たる決意を宿し、甲州印伝は私たちの暮らしに寄り添い続ける。



写真15 「ゆるキャン△」コラボレーション商品
令和元(2019)年 有限会社印傳の山本蔵



写真16 捕獲されたニホンジカを活用するプロジェクト
URUSHINASHIKAから誕生した「SAIKA」
令和5(2023)年 有限会社印傳の山本蔵

山梨県立博物館シンボル展

INDEN

～受け継ぐ手わざ、異国の薰り～

本リーフレットは、シンボル展「INDEN～受け継ぐ手わざ、異国の薰り～」(令和8年1月2日(金)～2月23日(月))の概要を紹介したものであり、展示内容・資料のすべてを掲載したものではない。本文の執筆・編集は丸尾依子(山梨県立博物館)が行った。

【出品・画像提供者】印傳博物館、株式会社 印傳屋上原勇七、東大寺、奈良国立博物館、有限会社印傳の山本



山梨県立博物館
ホームページ

令和8年1月2日発行



写真13 アイヌ文様の札入
昭和時代 印傳博物館蔵



写真14
株式会社 印傳屋上原勇七 オリジナルブランド「Caray」
昭和58(1983)年 印傳博物館蔵



山梨の土産や名産品のひとつに、甲州印伝がある。鹿革に藁などを焚いた煙や顔料、漆などで模様をつけた革製品で、財布やバッグなどの小物がつくられている。昭和62(1987)年には通商産業大臣(当時 現在は経済産業大臣)が指定する「伝統的工芸品」に、平成6(1994)年には山梨県知事によって「山梨県郷土伝統工芸品」に指定された。甲州印伝は、どのようにして山梨の名産品になったのだろうか。

● さまざまな装飾革と印伝



写真1 国宝 葡萄唐草文染革
奈良時代(8世紀) 東大寺(奈良県)蔵
写真提供 奈良国立博物館



写真2 小桜章威鎧 兜・大袖付(復元品)
山梨県立博物館蔵 原資料は平安～鎌倉時代
国宝 菅田天神社(甲州市)蔵

革を装飾する技法には、いくつかの流れがある。装飾革は、古くは高貴な人々が使用する革製品や武具・馬具に用いられてきたが、江戸時代まで庶民が持つ革の袋物にも用いられるようになった。

古くから用いられた技法のひとつに、藁などの煙で革を燻して模様をつけるものがある。現代の甲州印伝で「燻」と呼ばれるこの技法は、奈良時代の革製品にも見ることができる。東大寺に伝来する「葡萄唐草文染革」は、横長十字形の革製品で箱覆いなどに用いられたと考えられる。糊あるいは蝶などによって描いて防染した鹿革を燻して色づけ、葡萄唐草や中国の神仙思想に基づく異国情緒あふれる模様が表現されている(写真1)。

革の装飾は、武具の製作を通じても発展した。鎧には型染めをほどこすなどして彩ったり、漆で硬く固めたりした革が使用されている。「楯無鎧」の名で知られる小桜章威鎧 兜・大袖付は、柿渋と漆を引いた紙を彫って作った型紙や、木型を用いて鹿革に模様を染めている(写真2・3)。また、漆は革の防水性や堅牢性を高めるために表面に塗られたが、使い続けるとひび割れてくる。武具の場合は修繕をほどこすが、そのひび割れが松の樹皮に似ているとして、装飾的にあってひび割れさせた革を袋物などの小物に用いるようになった(写真4)。



写真3 小桜章威鎧 兜・大袖付(復元品)左肩部分



写真4 「松皮印伝」蓑入 江戸時代以降 印傳博物館蔵

装飾革には、海外から輸入されたものや、それらを真似たり、あるいは海外の布製品の模様の影響を受けてつくられたりしたものもあった。江戸時代に書かれた『装劍奇賞』には、「金唐革」をはじめとしたさまざまな模様をつけた革が紹介されている。「金唐革」は、革の表面に型押しで凹凸をつけ、さらに金属箔や金属泥などで装飾を加えたヨーロッパからの輸入革である。

また、ほかの輸入革には「印帝亞」または「應帝亞」「莫臥爾」「聖多默」「榜葛刺革」といった名前の革が並ぶ(写真5)。いずれもインド地方の名前であることから、インドで生産されたり、輸出されたりした革だったと推測される。インデンという名前の語源ははっきりとわかっているわけではないが、このインデヤと呼ばれた輸入革に由来すると考えられる。これらの輸入革の説明には、国内で真似てつくったものもあるとも書かれていることから、当初インド地方から輸入された装飾革のことをインデンと呼称していたものが、しだいにそれらを真似て国内生産した装飾革の名前になっていったのであろうと推測される。

輸入品の影響としては、インドの色鮮やかに染めた木綿布を更紗と呼び、その模様に似せて染めた装飾革も誕生した。現代の甲州印伝で「更紗」と呼ばれる型染めの技法である(写真6)。

江戸時代までに国内でつくれられ、インデンと呼ばれた革製品は、煙で燻すなどして色や模様づけたものが主流だったが、ほかにも、先に挙げた更紗をはじめ、武具の系譜を受け継ぐ型染めや、型押しのような効果を生む踏込、革を焦がしながら描く焼絵、刺繡(ステッチ)をほどこす縫取などさまざまな技法があったとみられる。一方で、現代の甲州印伝の主流となっている「漆付」は、当初、革表面の汚れや擦れによる色落ちを防ぐために、型紙を使って小さな粒状に漆を置いていく技法であったものが、模様そのものを漆で表現する技法に発展したと考えられる(写真7)。現代の甲州印伝と比べると、かつての印伝の技法や色は幅広かったようだ。また、江戸時代後期に人気を博した十返舎一九の滑稽本『東海道中膝栗毛』にも、印伝の巾着が登場し、印伝が庶民に人気のおしゃれアイテムだったことがうかがえる(写真8)。革製品の印伝に似せ、和紙に漆を塗り、型押しをほどこした小物もあったほどである。しかし、江戸時代の記録では、甲斐国で印伝がつくられていたこそわかるものの(写真9)、土産や名産として挙げているものは見あたらない。武具から袋物へと発展していく印伝の革工芸の産地は、この時代、甲斐国以外にもあったからである。



写真5『装劍奇賞』江戸時代以降 個人蔵



写真6 花唐草更紗三ツ巻財布
江戸時代以降 印傳博物館蔵



写真7 長入子絞漆付巾着
江戸時代以降 印傳博物館蔵

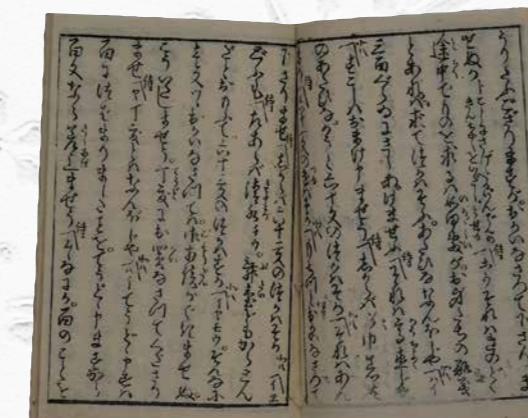


写真8 十返舎一九『東海道中膝栗毛』
享和2(1802年)~文化11(1814年) 山梨県立博物館蔵

△甲州印伝の誕生とひろがり

印伝が山梨の名産品として推し出されていくのは、明治時代以降のことである。印伝を製造販売した商家や山梨県は、製品を明治22(1889)年の第4回パリ万国博覧会や、明治28(1895)年と明治36(1903)年の内国勧業博覧会などに出品し、それを広告に書いた(写真10)。

例えば、明治40(1907)年10月に掲られた木版の広告には「第四回第五回内國勧業博覧會 褒状下賜」「山梨縣主催府九縣聯合共進會賜二等賞牌」との出品受賞歴を記し、さらに上部には「伏見宮殿下賜御買上光榮」と皇族が購入したことを宣伝文句として記載している。品質の良さを謳うことにより加え、出品の履歴や褒賞によるアピールや権威づけを行っていることが、この時代の広告の特徴と言えるだろう(写真11)。こうした時代を経て、明治時代末期から昭和時代初期にかけての観光案内には、甲州印伝が名産品として書かれるようになる。柳宗悦による木喰仏に関する書籍の装幀にも、市川大門の和紙とともに甲州産印伝が用いられた(写真12)。甲州印伝は山梨を代表する産物として自他ともに認める存在となった。

昭和時代の高度経済成長期となり、多くの人が観光旅行に出かけるようになったころの甲州印伝は、土産としての製品づくりも行った。つくったのは山梨の土産だけではない。例えば、北海道の土産品として販売されたアイヌ文様の印伝の小物が、甲州印伝によってつくられていた(写真13)。行商による商品の販売も行われた。甲州印伝と同じく山梨の伝統的工芸品である印章と一緒に販売されたり、顧客へのサービスとして甲州印伝の財布が渡されたりしたという。



写真9『甲府買物独案内』嘉永7(1854年) 山梨県立博物館蔵



写真10 第4回パリ万国博覧会出品時メタル
明治22(1889)年 印傳博物館蔵

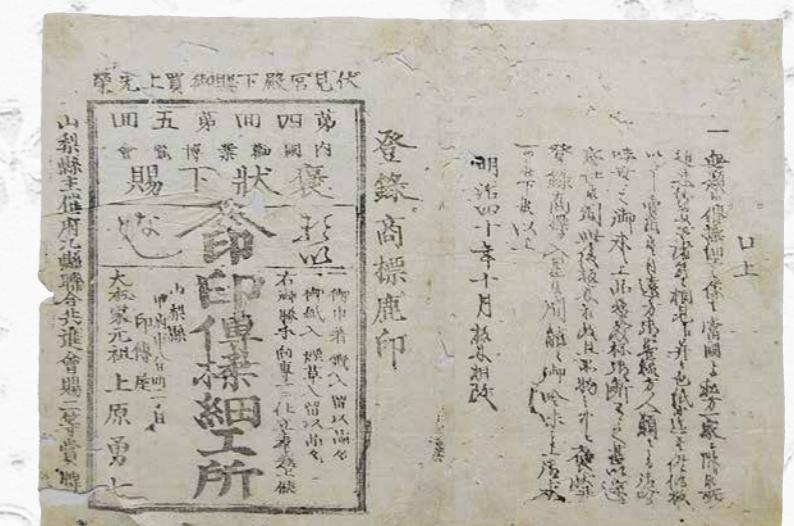


写真11 明治40(1907)年の甲州印伝の広告 山梨県立博物館蔵



写真12『木喰上人作 木彫佛 甲種』
大正14(1925年) 山梨県立博物館蔵